

島根県の地震

令和8（2026）年8月

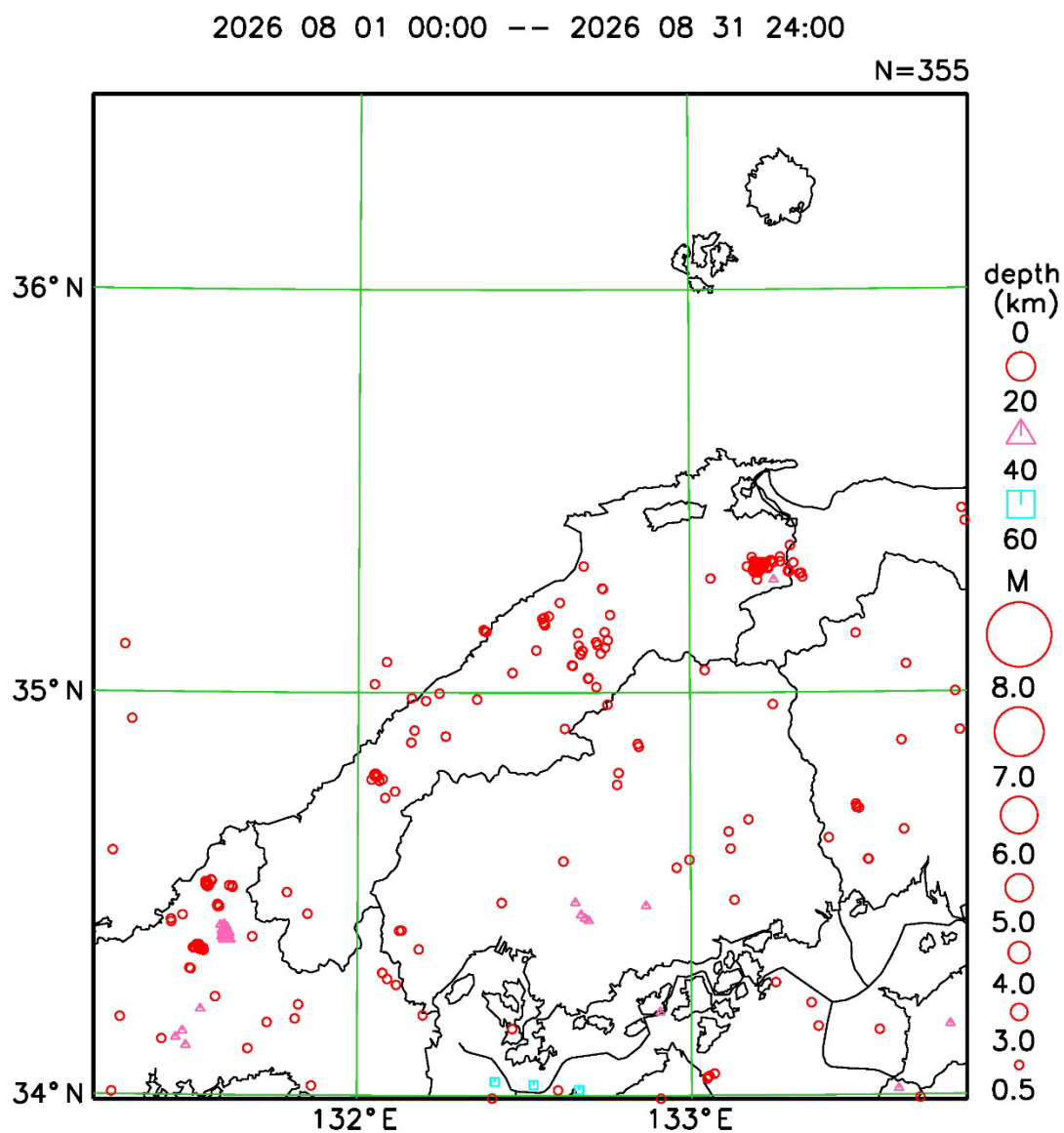
・震源要素（緯度、経度、深さ、マグニチュード）は暫定値です。後日、再調査のうえ修正されることがあります。

・本資料は、国立研究開発法人防災科学技術研究所、北海道大学、弘前大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、京都大学、高知大学、九州大学、鹿児島大学、国立研究開発法人産業技術総合研究所、国土地理院、国立研究開発法人海洋研究開発機構、公益財団法人地震予知総合研究振興会、青森県、東京都、静岡県、神奈川県温泉地学研究所及び気象庁のデータを使用しています。

また、2016 年熊本地震合同観測グループのオンライン臨時観測点（河原、熊野座）、2022年能登半島における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（よしが浦温泉、飯田小学校）、2025年トカラ列島近海における合同地震観測グループによるオンライン臨時観測点（平島、小宝島）、EarthScope Consortium の観測点（台北、玉峰、寧安橋、玉里、台東）のデータを用いて作成しています。

松江地方気象台

島根県およびその周辺地域の地震活動 2026年8月1日～31日

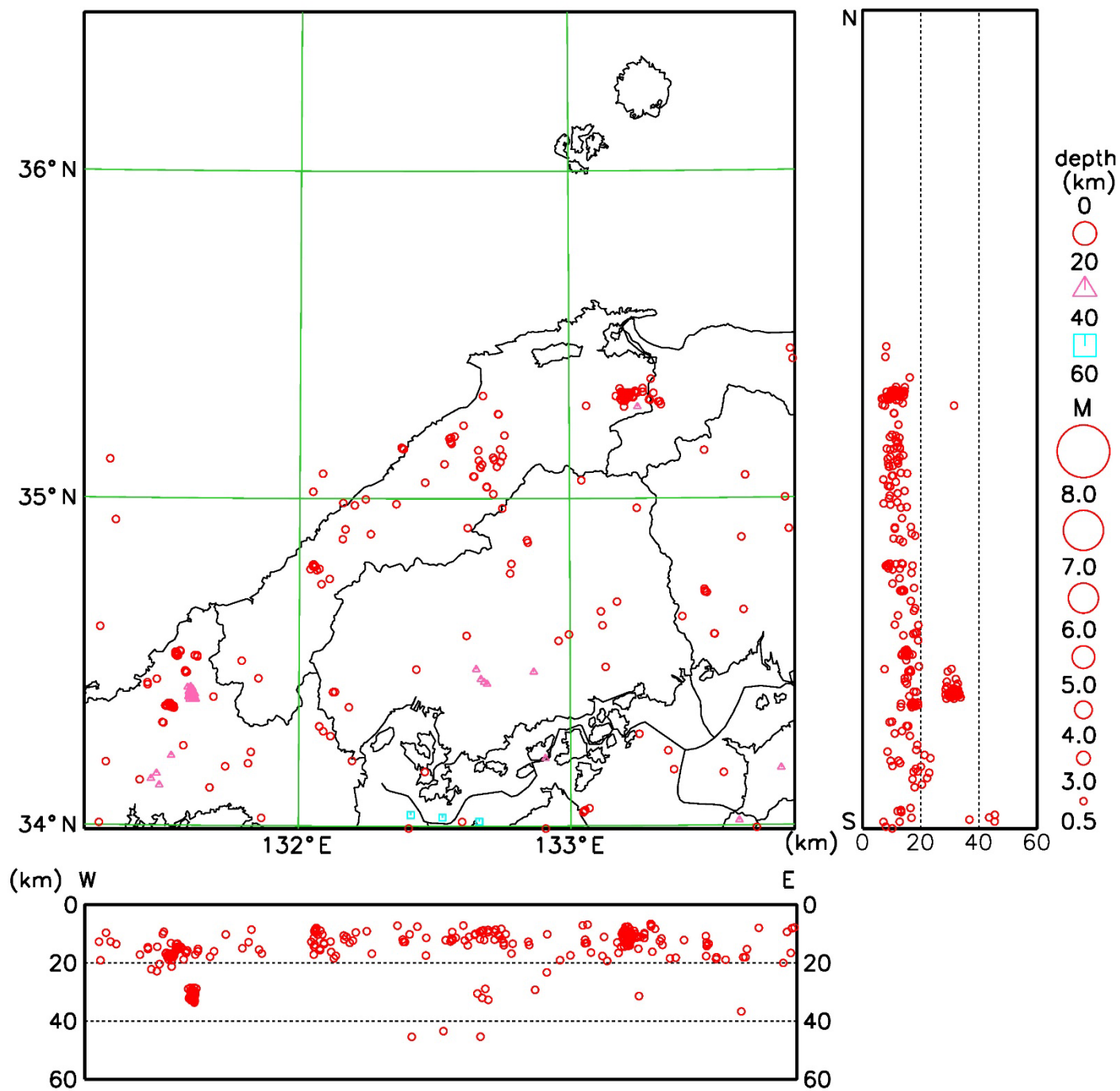


[概況]

今期間、M0.5以上を観測した地震は355回（7月は295回）でした。
また、島根県内で震度1以上を観測した地震はありませんでした。

[断面図]

2026 08 01 00:00 -- 2026 08 31 24:00



「液状化」について

今年1月6日に最大震度5強を観測した島根県東部の地震の際には、鳥取県・島根県の一部農地で液状化による被害が発生しました。今回は地震災害の一つである「液状化」について解説します。

○液状化とは

図1は液状化発生の模式図です。普段、水を多く含んだ地盤は①のように砂粒同士が支えあい、その間を水で満たされている状態で落ち着いています。地震により強い振動が加えられると、②のように砂粒の支えあいが崩れ、水と砂粒が一体となり液体のようになります。また、水が砂とともに噴出する噴砂現象も発生します。水が砂と共に地表へ噴出すると、③のように沈下・亀裂・陥没などの地盤変形が起こります。液状化が発生しやすい場所は、地下水位の高いゆるく堆積した砂地盤で、例えば、埋立地、干拓地などがあげられます。

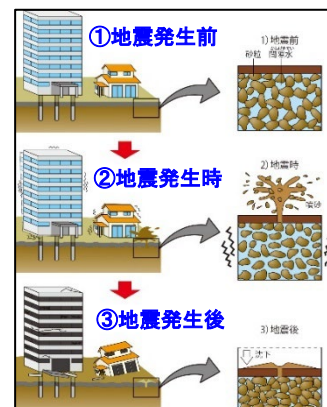


図1 液状化のしくみ
(出典：地震調査研究推進本部IP
一部加工)

○液状化による被害

右の写真は、「平成23年(2011年)東北地方太平洋沖地震」の際の関東地方での液状化による被害写真です。地盤が液状化すると地上の重い構造物等は沈み、一方、比重の小さい地下埋設管やマンホール等は浮き上がります。このため住宅の沈下や傾斜、道路やライフライン施設の被害など、地震後の生活に大きな影響を及ぼす被害が発生し、またこれらが複合的に発生することで影響は長期に及ぶことになります。



地盤沈下による水槽の傾き 歩道が陥没しマンホールが浮上
(出典：気象庁 災害時地震・津波速報)

○島根県で液状化が発生しやすい場所

図2は「島根県地震・津波被害想定調査報告書」(以下リンクに掲載)の液状化危険度分布図(弥栄断層帯および宍道断層による地震の例)です。液状化危険度※が「極めて高い・高い」地域は、主に平野部や川沿いの低い土地に分布しています。

お住いの地域における地震のリスクを把握しておくことは大切です。この機会に「島根県地震・津波被害想定調査報告書」や自治体提供のハザードマップ等により、液状化を含む地震による地域のリスクを確認してみてください。

島根県ホームページ

https://www.pref.shimane.lg.jp/bousai_info/bousai/bousai/bosai_shiryo/jishin_tunami_higaisoutei_houkokusyoH30.html

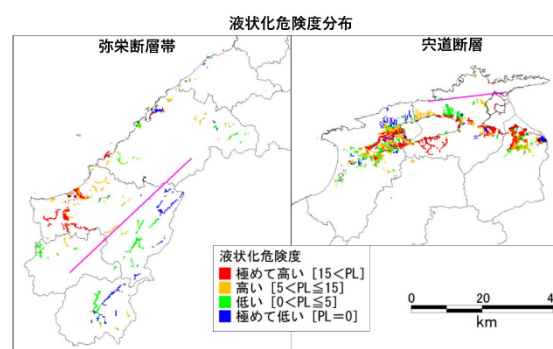


図2 液状化危険度分布(弥栄断層帯、宍道断層のケース)
(出典：島根県地震・津波被害想定調査報告書を加工)

※PL値：液状化の可能性を総合的に評価するための指標でPL値が15より大きい場合、液状化の危険が極めて高いとされている。